

一寺あり暮春の藪にうちかくれ

門川の薄氷日々に梅椿

・百姓の居らずなりたり蝶の晝

一もとの枝垂れざくらに廻り縁

晩涼や志摩も果てなる波切町

町裏を線路が走り朝ぐもり

座布團と書籍二三と部屋西日

瀧宮の社務所にありし大太鼓

渡御を待つ水幾度も打ちにけり

小百姓日焼壘に寝ころがり

繭を搔く軒端を通り平湯バス

もんぺの子あらはれ羽抜鶏かくれ

夏桑に灯のもれてゐて町も果て

高原の郵便局や秋日和

百姓は寝るがたのしみ盆の雨

駒に雪一筋走り烏屋びらき

色鳥が来てをり卓に二三の書

大猪を前に人々縁に腰

鶏頭に唯海があるばかりなり

天倉に遅るゝ八鬼の薄紅葉

日脚伸ぶ仕事の嵩のやゝに減り

上人は留守でありけり夕時雨

子を負ふて冬田の徑を醫者通ひ

肥舟が行き竹瓮舟とゞまれる

遠火事の衰ふるさまなかりけり

大いなる殿様火鉢皆あたる

咳の中に會議はすゝみけり

提唱の老師咳入りたまひけり

泊りたる尾鷲は鯿の景氣かな

石路黄なりこの頃和書に親しめる

好晴やむらさきさし、散紅葉

萬兩や上人の間は留守のまゝ

昭和十九年

春潮の泛^ふ子^こに羽^はばたきのる鷗

裸の子一人あらはれ山の町

稻かけて出来たる蔭に憩^{やす}ひをり

倒れ木に乗りこぼれつゝ泳ぐ鴛鴦

鮒敷の泛子一つづゝ波に乗り

鮒敷の泛子ゆれ波も灘めき來

高々と鷗がとんで鮒見小屋

鷗いと群るゝあたりが鮒場とか

鮒敷を遠廻りして鮒見舟

鯽の衆腹ごしらへを急ぐなり

鯽舟のいづれもとれる晝餉かな

湖の波冬菜島の上に尖り

跋

今度私の句集が出ることになった。私は以前から句集を出して見たいと云ふ氣持は漠然とは持つてをつたけれども、躬ら卒先して出して見やうと云ふほどの熱意はなかつた。それは自分の句が句集として纏めるほどの價值あるものとはどう考へても思はれなかつたからである。また一面、自分の俳句はこれからである。一生に一家集を残し得れば結構ではないか。そんな考へが常に私の心を支配してをつたからでもある。

その私の處女句集が出版されることになった。それは私の周圍の人々が非常に熱心に勧めてくれたからである。否、勧めてくれたと云ふよりも、周圍の人々が私の句集を出してくれたと云ふ方が寧ろ當つて居るかも知れない。「牡丹」を始めた時もさうであつたし、遅疑逡巡と云ふほどでは無いにしても、總て私は物事に對して實行力に缺けてゐるところがあるやうである。其處へ前述のやうな考へが加つて容易に腰を上げ得なかつ

た私の句集が、この苛烈な大東亞戦争の直中に生れ出ると云ふことは、洵に奇縁と云ふより外はない。

偏へに知友諸君の盡力の賜ものであることを感謝しなければならない。

私が俳句を始めたのは大正二年であつて、私の十七の歳である。或少年雑誌の俳句欄を見て試みたのが最初で、その後、讀賣新聞の内藤鳴雪翁選に投句して、入選したのに刺戟されて本氣に始める氣になつた。その頃私の父は俳句は作らなかつたけれども、鑑賞することは好きであつて、よく蕪村の句などを口吟んでは聽かせてくれた。父はまた私の讀賣新聞入選句等を批評してくれたりしたものである。さう云つた父の感化も私の句生涯に相當大きい影響を興へてくれたことは見逃すことは出来ない。

ホト、ギスに投句を始めたのはそれから二三年後であらう。投句を始めてから二三年経つて次の一句が初入選したのが大正七年であつた。その時の嬉しさはいまだに忘れ得ないところである。

足ひろげて蜘蛛大いなり月の前

それから引續いて今日まで虚子先生のお世話になりつゞけてゐるのである。思へば長い間よく面倒を見て下さつたものである。師恩の深さ洵に空怖しいほどである。

その間原石鼎先生、故田中王城先生、故鈴木花蓑兄の知遇を辱くしたことも茲に銘記しなければならぬ。

この句集に採録した句は、大正七年から昭和十九年に至る私の作句中、ホト、ギス同人團欒に掲載された二三のものを除けば、ホト、ギス雑誌・國民俳句・毎日俳壇・俳諧雑誌・玉藻五句集・各種の句會・其他に於て悉く虚子先生の御選を経たもの許りである。初期の稚拙を脱し得ないやうな作品でも、何かの意味で私の句生活の記録になりさうなものは採録した。年代順に配列したのもさう云ふ意味からである。大正時代の作品は句數が少なかつたので年代順を廢して大正時代の題下に一括することにした。

「稗籠」と題したのは、別に大した意味がある譯ではない。曾て飛騨平湯温泉に遊んだ

時、山のわらべの稗籠を負んだ素朴な姿にいたく心を牽かれたからである。

「稗籠」の上梓に當つて高濱虚子先生から序文に代ふる御懇篤なるお手紙を賜つて巻頭を飾ることを得たのは洵に無上の光榮と云はなければならぬ。先生に師事し得たことの幸福を今更の如く痛感するばかりである。宮田重雄畫伯の装幀を賜つたこと、水野惠城、二村蘭秋、小原牧水、矢津羨魚の諸君を始め牡丹會同人諸君の御盡力に對して茲に深甚の謝意を表する次第である。

昭和十九年六月二十五日

加藤霞村

昭和十九年十月二十五日印刷
昭和十九年十月二十八日發行

著者 加藤霞村

發行者 稗籠刊行會
名古屋市東區山口町十五番地(牡丹會内)

印刷者 倉島清高
東京都芝區田村町四丁目二番地
(東京六五)

印刷所 東都印刷株式會社
東京都芝區田村町四丁目二番地

發行所 牡丹會
名古屋市東區山口町十五番地

(非賣品)



911.368
KA 864
2



終

